# 創刊のことば

経濟學の領域は，わが國でもふたたび多彩な展開を見せるようになったが，現實の經濟はあまりにも貧しい。貧しいだけではない，偏ってもいる。

こうした狀態のただ中で，社會科學としての經濟學に課せられた責務や寄せられる期待は大きいはずである。われわれは，この責務を果しうるかの反省において謙虛であるとともに，その期待にこたえんとする努力においては野心的でありたい。

そのためにわれわれは，二重の意味で「土俵」の外に出なければならぬと思う。第一には，みずから「土俵」を區切り，問題や條件を限定して，Aであれば P，Bであれば Q といった調子の自明の論理を繰返すことの限界を自覺しなければならぬ。現實に照してその命題が眞であるか否かを檢證しうる假設をたてる勇敢さを經濟學者が失ってから，すでに久しいのである。第二には，なれた「土俵」から出て，われわれの研究は世界の舞臺でもまれなければならぬ。わが國の經濟學があまりにもしばしば，外國經濟學の紹介，解釋，考證に專念してきたことを，實踐的な市井人の常識は，これまた久しくあきたらず思ってきているはずである。

「經濟研究」をあえて「經濟」の研究としたのは，右の第一の意味において，現實の經濟を對象とする態度を生かそうとするためであり，また，この季刊誌の紙面を廣く世界の學界にひらいて投稿をもとめることにしたのは，右の第二の意味において，「土俵」の外に出るためである。

この主旨に贊同される江湖の士が，鞭撻と叱正を惜しまれないことを希望する。

1950年1月

一橋大學經濟研究所長　都 留 重 人